

2021年2月13日号
(3483号)

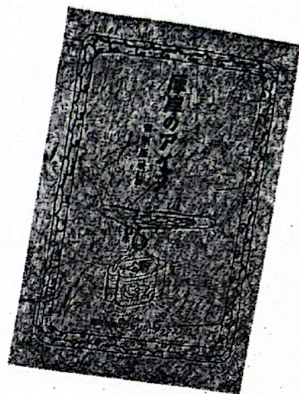
上野昌之

佐藤保治 著

▶ 厚岸のアイヌ

復刻版(改訂版)

10・25刊 四六判138頁 本体1200円
藤田印刷エクセレントブックス



厚岸は北海道の南東部、釧路の東約40キロに位置している。特産物の牡蠣や蝦夷三宜寺の二つ国奉守などの史跡がある有名である。「あつげし」の由来はアイヌ語で、「アツケウセイ」(atke-wei)「オヒヨウニ」(ohi-yo-ni)「オヒヨウニ」の皮・刺々、いづもする。所、あるいは「アツケウ」(atke-wei)「オヒヨウニ」の「忍」に由来するものと考えられ、自然豊かな地で古くからアイヌ民族が生活してきた。

東部の海産物生産の拠点や国後や千島などの交易中継地となった。また寛永年間にはオランダ船が来航し、その後幕末までのあいだにロシアなどの異国船が度々現れ、幕府は北方への危機感を高めた。このような厚岸の特異な地理的状況はこゝに住むアイヌ民族にも大きく影響していくことになる。こうした厚岸の歴史をアイヌ民族の視点から見直して書かれたのが『厚岸のアイヌ』である。

本書は長年道東で教員を務め、厚岸の上尾幌中学校の校

いう時代、北海道ではアイヌ差別が依然として顕著であり、アイヌ民族の人々は差別に直面することに堪えられず、下着るならば「襦た子」を起すことと勉められてきた。しかし、一方ででは学校教育でアイヌ民族の子もたちへの同化や差別を払拭することを各所で問題意識を持つ教員と地域のアイヌ民族の人々との協働により反差別運動が進められていた。佐藤氏の執筆も厚岸アイヌの姿を掘り起こすことにより、長

体である。大野氏は銚路地方のアイヌ民族の文化や歴史に関心を持ち、地域のアイヌ民族の事象の細目を調査していた。道内にはアイヌ民族が集住する地域がいくつかあるが、道内の他の地域にもアイヌ民族の人々は生活をしている。マジョリティ社会の中では見えにくい存在であり、表立ってアイヌ民族であることの表明はあまりない。地域の

の本の復刻は厚岸とも関係の深い銚路アイヌ文化懇話会の方々の賛同を得て共通の思いのもとで形にしたものである。初版の本のガリ版印刷を丁寧に読み解き、アイヌ語地名などに修正を加えながら、新たに江戸時代から続く「アイヌ神楽」の資料と国泰寺のアイヌ民族用石碑の碑文を添え、最後に地図を折込み復刻・改訂版の出版となった。

記述していることである。場所購買制におけるアイヌの悲惨な状況からクナシリ・メナシの戦いが起こり、網走被虜の「蝦夷奥曾列像」に現れる首長「ユートイキウ」の兄・関与、その後の厚岸の状況、開国船の来航による幕府の対応とアイヌ民族への政策の変化、災害や伝染病によるアイヌ人口の減少、幕末までの厚岸の状況が、つぎに書かれた。アイヌの苦難の歴史の方々にアイヌの苦難の歴史を知ってほしいとの原著者の思いを継いで本書は復刻された。アイヌ民族の文化と歴史に興味・関心がある方々なら、北海道の地域誌、歴史に興味がある方々には是非動機の一冊である。

(東洋大学文学部・教育学)

由來の樺太文化と樺太由來のオホ・ツク文化の接觸する地域で、異質の文化が融合したところでもある。アイヌ文化の土地といふ文化が広がったところでもある。アイヌ文化の胎動の地ともいえる場所である。

長で定年退職した佐藤保治氏（一九二二—二〇〇五年）が一九七三年（昭和四八年）に著したものである（二〇〇八年に刻したものである）。初版本は中学校補助教材として書かれたもので、B5版4頁、版割りで約60頁の冊子だった。佐藤氏は『厚岸町史』の編纂にも関わり、和人による歴史の偏在性に疑問を持ち、アイヌの歴史に光を当てる必要性を感じた。ペレ・ウタリとは若仲間を意味する。アイヌ民族と和人の若者が友情を深め、無知と偏見のない社会を築

アイヌと晩会の高齢化も進んでいる。まさに厚岸もそうだった地域であり、50年近く前に書かれたこの『厚岸のアイヌ』は、厚岸と繋がりのある人々にとっては自らの祖先が歩んできた歴史をなごめることになる記録である。大野氏はそうした厚岸の歴史を見つめ直すことで在りするアイヌ民族の人々と彼を離れた厚岸アイヌの末裔へ自らの記憶を

本書の内容は初版当時のままである。アイヌ史では近年研究が進んでいる。本書の内容には今日の見解では不十分などともある。しかし、佐藤氏が願ったアイヌ民族の人々の歴史を取り戻し、アイヌ民族の理解が深まり共生する社会の実現を目指すことにはたがわぬ。

本書の意義は、厚岸という特異な地域におけるアイヌ民

ている。明治期に入つても國防の必要から和人入植者の増加のみにみる開拓便や三眞時族のアイヌ政策よりアイヌ民族への入植が準んだこととを昭和開土までのアイヌ民族の苦難が記される。その中でアイヌ民族の名士太田救助助の活躍にも触れられてはいるものの、アイヌ人口の減少はますます著つた状況になつてい

献呈 (『釧路地方のアイヌ語語彙集』刊行に至るまで)

今から 61 年前の 1960 年(昭和 35 年)の 4 月、私は釧路市内の中学校に上がった。
同時に梅楓塾(中川久平先生による中川塾の正式名称)と言う英語数学専門の私塾にも通った。
その塾で当時北海道学芸大学釧路分校(=現在の北海道教育大学釧路校)でまだ英語講師だった 27 歳の若い東京外国語大学出身の金子亨先生(1933-2011)に初めてお会いし、そしてその猛特訓の虜になった。何しろ当時中学に上がったばかりの門外漢に、ヘミングウェイやサマセット・モームの短編テキストを東京から取り寄せ、いきなり速読直訳に挑戦させられるのである。
今でもサマセット・モームの短編『The Kite』(カイト=凧)の丸暗記が出来なければ、即退塾、即落第と言う有無を言わせぬ集中力鍛錬に根を上げながらも心酔しきっていた猛勉の頃を思い出す。

その後金子亨先生が岩手大学助教授で移動されて一旦交流は途絶えたが、先生がドイツ留学を果たし、帰国後千葉大学文学部人文学科日本・ユーラシア文化コースを開設されたことを知って驚嘆した。1960 年代後半から 70 年代はレヴィストロースの『悲しき熱帯』を初め世界的な文化人類学ブームが我が国にも押し寄せていたが、金子亨先生は「日本とユーラシアの日本近隣の諸地域における諸民族の言語・文学・思想・民俗・芸能などの諸文化を見つめ、考えていくコース」(大学案内)として、しっかりとした言語学センターを千葉大学に構想したのであった。

金子亨先生こそ「昭和・平成の日本言語学界を代表する学者」と称され、特に日本のアイヌ語研究、北東アジア言語研究で多くの業績を残され、更には多くの若い研究者を育てられもした。

その中心に千葉大中川裕先生がいて、更に北大丹菊逸治、北大北原モコトナシ(次郎太)、道立博物館小川正人研究部長、ウポポイ展示部長田村雅史等々後継者諸先生は列記しきれない。

また 2003 年 12 月の「地球ことば村・世界言語博物館」開設に至るまでの市民運動にも目を見張るものがあつた。少数話者言語(或いは「消滅危機言語」、「消滅寸前言語」)の保護やその母語話者の権利の擁護を訴え続け、「ことば」にまつわるあらゆる事象に多角的に光を当てる活動を行なって今から 10 年前に 78 歳で生涯を終えられた。

1999 年に刊行された『先住民族言語のために』は、今なお言語学の第一級基本文献として君臨している。その他『北方ユーラシアの先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究』と『古アジア諸語の複合構造の類型』も、世界言語学会に於いてその評価が最も高い言語学者として認識されている。

さて『釧路地方のアイヌ語語彙集』は、当初公的支援を受けての刊行を予定していた。

しかも「釧路アイヌ語の会」が長年に亘り蒐集してきたエカシ・フチからの話者としての記録をまとめたものである。当地方では和人との接触が早かったことから日本語の影響が多くみられることも予想されている。例えば p・t・k などの音節末子音は日本語には見られない。

しかし乍ら、コロナ禍で人的交流や会議打合せが途絶えがちで、正確な「監修」を求めるには更なる時間と経費負担が求められるばかりと判断し、現時点での今般刊行とさせて戴いた次第である。どうか次の世代が此のテキストをいつかバージョンアップされることを強く祈念するばかりである。

(発行人) 藤田印刷エクセレントブックス 藤田卓也

【新刊のご案内】

釧路地方のアイヌ語彙集

釧路アイヌ語の会編集

「道東アイヌ語辞典」ではなく『釧路地方のアイヌ語彙集』なのかが良くわかる!!

オーストラリア・アボリジニやニュージーランド・マオリ、カナダ・イヌイトでは部族コミュニティがたくさん残っているよ!!

遡ること1964年に編集された代表的なアイヌ語文献である「アイヌ語方言辞典」(服部四郎編)には釧路地方の方言が収められていなかった。その空白を埋めることとなったのが、釧路アイヌ文化懇話会が1998年3月に刊行した「アイヌ・モシリ」[幻のアイヌ語誌復刊]であった。これは1994年11月に山本多助の遺品の中から発見された冊子「アイヌ・モシリ」「ウタサ・カンビ」を集約したものであった。これを継承した「釧路アイヌ語の会」はこの翻訳に取り組み、その成果を2002年3月に「アイヌ・モシリ」山本多助作品集として発行した。更にその翻訳過程で採取されたアイヌ語を中心に、それまで発表されていた釧路地方のいくつかの単語を収集し、2004年2月に「アイヌ語釧路方言語彙(こい)」として発行した。今回の「釧路地方のアイヌ語彙集」は、上記の「アイヌ語釧路方言語彙」に、八重九郎と四宅ヤエの語彙を追加したものである。

釧路アイヌ語の会 会長 合沢 寛

〈アイヌ語学習をするために〉

- ① 知里真志保「アイヌ語辞典」(1956年楡書房)
- ② 知里真志保「地名アイヌ語小辞典」(1989年北海道出版企画センター復刻版)
- ③ 知里真志保「アイヌ語入門—とくに地名研究者のために」(1956年楡書房、1985年北海道出版企画センター復刻版)
- ④ 知里真志保「アイヌ小辞典」(1956年楡書房、1984年北海道出版企画センター復刻版)
- ⑤ 知里真志保「分類アイヌ語辞典」第1巻植物篇、第2巻動物篇、第3巻人間篇(1953~54年年日本常民文化研究所、1975~76年平凡社)
- ⑥ 知里真志保「アイヌ語学」(2013年Kindle版育空文庫)
- ⑦ 知里真志保「アイヌ語のおもしろさ」(2015年Kindle版育空文庫)
- ⑧ 知里真志保「アイヌ語と日本語の関係」(2015年Kindle版育空文庫)
- ⑨ 金田一京助・知里真志保「アイヌ語法概説」(1936年岩波書店、1999年ゆまに書房復刻版)
- ⑩ 萱野茂「萱野茂のアイヌ語辞典」(1996年三省堂)
- ⑪ 田村すず子「アイヌ語の世界」(2013年吉川弘文館)
- ⑫ 田村すず子「アイヌ語沙流方言辞典」(1996年草風館)
- ⑬ 村崎恭子「アイヌ語基礎語彙集(東別方言と本別方言)」(1983年東京外国語大学)
- ⑭ 村崎恭子「カラフトアイヌ語」(1976年国書刊行会)
- ⑮ 村崎恭子「カラフトアイヌ語—文法編」(1979年国書刊行会)
- ⑯ 村崎恭子「樺太アイヌ語入門会話」(2009年緑鯨社)
- ⑰ 北道邦彦「知里幸恵のウエベケレ(昔話)」(2004年北海道出版企画センター)
- ⑱ 北道邦彦「アイヌ語地名で旅する北海道」(2008年朝日新書)
- ⑲ 久保寺彦彦「アイヌ語・日本語辞典稿」(2020年草風館)
- ⑳ 平山裕人「アイヌ語古語辞典」(2013年明石書店)
- ㉑ 知里高央・横山孝雄「アイヌ語絵入り辞典」(1994年蝸牛社)
- ㉒ 服部四郎「アイヌ語方言辞典」(1964年岩波書店)
- ㉓ 赤木三兵「アイヌ語集」(1971年山音文学会)
- ㉔ 赤木三兵「アイヌ語小辞典—アイヌ語対和語」(1972年山音文学会)
- ㉕ 中川裕「アイヌ語千歳方言辞典」(1995年草風館)
- ㉖ 佐藤知己「アイヌ語文法の基礎」(2008年大学書林)
- ㉗ 佐々木弘太郎「樺太アイヌ語地名小辞典」(1969年みやま書房)
- ㉘ ジョン・バチラー「蝦夷英三対辞書」(1995年国書刊行会)
- ㉙ 片山龍峯「日本語とアイヌ語」(2004年すずさわ書店)
- ㉚ 地蔵慶護「アイヌ語・恵庭の地名をたどる」(2017年響文社)
- ㉛ 沢井トメノ「十勝本別アイヌ語分類辞典—人間篇・動物篇・植物篇・民具篇」(1989年本別町教育委員会)
- ㉜ さんおん文学会編「アイヌ語録2300語収録(アイヌ語小辞典)」(7年山音文学会)
- ㉝ 中川裕「CD付きカムイユカラを聞いてアイヌ語を学ぶ」(2014年白水社)
- ㉞ 切替英雄「アイヌ神話集辞典」(2003年大学書林)
- ㉟ 知里幸恵「アイヌ神話集(岩波文庫)」(1978年岩波書店)
- ㊱ 知里むつみ・横山孝雄「アイヌ語会話イラスト辞典(日本語)」(1088年蝸牛社)
- ㊲ 神保小虎・金沢庄三郎「アイヌ語会話辞典(日本語)」(1986年北海道出版企画センター)
- ㊳ 中川裕・中本ムツ子「CDエクスペスアイヌ語」(2004年白水社)
- ㊴ 中川裕「CD付ニューエクスペスアイヌ語(日本語)」(2013年白水社)
- ㊵ 北海道ウタリ協会「アコロイタク アイヌ語テキスト」(1994年クルーズ)



書名: 釧路地方のアイヌ語彙集
 編集: 釧路アイヌ語の会
 判型: A5
 頁数: 212ページ
 発売日: 2021年2月16日
 定価: 1,800円+税
 発行: 藤田印刷エクセレントブックス
 ISBN 978-4-86538-108-5 C0039

「厚岸のアイヌ」46年ぶりに復刻

上尾幌中の元校長 佐藤保治さんが執筆

10月25日 第2刷発行 定価1,200円＋税 発行：藤田印刷エクセレントブックス

厚岸町立上尾幌中学校(2009年に閉校)の校長を勤めた故・佐藤保治さんが、厚岸町のアイヌ民族についてまとめた冊子「厚岸のアイヌ」が今年6月、46年ぶりに復刻された。関係者は「アイヌ民族への差別に向き合おうとした、佐藤さんの熱い思いを感じてほしい」と願っている。

校長退職後、厚岸町史編纂委員だった
著者の、置き土産となった

道東アイヌ史の労作



厚岸のアイヌ復刻版(改訂版)*目次
解説文 ペウレ・ウタリの会会員 大野 徹人
前言

第一章 釧路・根室の生成と遺跡

- 1 釧路・厚岸の生成
- 2 釧路の遺跡
- 3 厚岸の遺跡

第二章 アイヌ民族の歴史

- 1 アイヌ民族の歴史
- 2 アイヌ民族の戦い
 - ・コシャマインの戦い
 - ・シャクシャインの戦い
 - ・クナシリ

第三章 厚岸のアイヌ

- 1 厚岸場所開設のころ
- 2 オランダ船の寄港
- 3 シャクシャインの戦いの後
- 4 場所請負制度
- 5 厚岸乙名イコトイ
- 6 幕府直轄と同化政策
- 7 そのころの厚岸
- 8 松前藩の復領と人口の激減
- 9 外国船の来航
- 10 幕府再直轄と仙台藩領
- 11 幕末のころのアイヌ人
- 12 明治新政府の対策
- 13 根室県の救済策
- 14 自立への努力
- 15 先覚者太田紋助
- 16 共有地
- 17 別寒辺牛村入殖
- 18 消え失せた人びと

沿革史

参考文献

アイヌ神楽・国泰寺

編集後記

明治初年 厚岸地方地名図

貴店番線

発行：藤田印刷エクセレントブックス TEL0154-22-4165 FAX0154-22-2546

月
日

「厚岸のアイヌ」復刻版(改訂版)

佐藤保治=著

冊

定価 1,200 円＋税 ISBN 978-4-86538-109-2 C0039